

令和3年産米「美味しい“あきたこまち”コンテスト」（JAグループ秋田・JA全農あきた主催）で優良賞（全農秋田県本部県本部長賞）を受賞した伊藤穰さん。平成30年産の同コンテストにおいても優秀賞（秋田県農業協同組合中央会会長賞）を受賞し、県内上位5名の「ザ プレミアムファイブ」に輝くなど、安定的かつ高品質な水稻栽培に定評がある。伊藤さんの令和3年産米における栽培履歴や米作りへの想いから、地力の向上や良食味生産への実直なすがたを見る。

## 堆肥と土づくり肥料の継続

伊藤さんは秋田市雄和で、稻作と繁殖和牛の畜産を営んでいる。令和3年度は、主食用「あきたこまち」7・9ヘクタールとホールクロップサイレージ用の水稻3・9ヘクタールを作付けした。

就農してから、今年で18年。毎年継続して、自家製の牛堆肥を散布している。投入量は10アールあたり1・5トン。加えて、茎数や根量が増えて高温障害の抑制も期待できる「シリカ未来プラスII」を施用する。

伊藤さんが住む種沢地区では、約20年前に1ヘクタール規模の基盤整備が行われた。基盤整備の後は切土や盛土の部分

が目立ち、米の品質にムラが見られたが、堆肥を毎年投入し続けたことで、土質が安定したという。

## 良食味米を意識して

播栽培をこれからも続けていきたいです」とも話した。

## 就農研修で身につけた 直播の技術が奏功

7・9ヘクタールの「あきたこまち」のうち、2ヘクタールで直播栽培をしている。「美味しい“あきたこまち”コンテスト」で受賞した米は、直播栽培の圃場で収穫したものだ。秋田県農業試験場で2年間の新規就農研修を受け、水稻栽培の基本を学んだ伊藤さん。その際の担当者が直播を研究していたこともあり、研修中に直播栽培の技術や経験も蓄え、就農後の米作りに生かしている。

令和3年産米の栽培では、4月30日に耕起し、5月10日に代掻きした。カルバーコーティングした種子を、5月15日に播種。8月1日に出穂が見られ、落水を8月30日に行つた。

「平成30年の『美味しい“あきたこまち”コンテスト』での受賞を機に、選別方法を工夫するなど、良食味生産への意識が強くなりました」と伊藤さん。再度の「ザ プレミアムファイブ」や、そのなかでもトップである最優秀賞の受賞も見据えながら、今年も米作りに取り掛かる。

伊藤さんは、秋田県農業試験場で身に付けた直播栽培の技術をしっかりと実践し、加えて、堆肥と『シリカ未来プラスII』による土づくりを長年続けることで、地力を高めています。毎年のように襲う高温に対処し、品質の高い米を作ることができるのは、真摯な栽培管理に取り組んでいる結果です。



秋田地区営農センター  
佐藤 恋太 主任

